

アントレプレナーシップ教育の取り組み 品川女子学院 起業体験



28歳の自分を思い描き、どう生きるのかを考える「28Project」は、2003年にスタートした品川女子学院のアイコン的プログラム。アントレプレナーシップ教育のフロントランナーでもある同校で最初に行われた「起業体験」は、「28Project」の中で社会科が行う金融経済教育という位置付けでした。当時は、「中高生がビジネスなんて」「商業科に任せればよい」という逆風。しかし、動じることなくプログラムを“進化”させてきた“信念”の源を確かめるべく、品川女子学院に漆紫穂子理事長を訪ねました。



品川女子学院
漆紫穂子理事長

将来、絶対必要になるという確信

2005年頃、日本企業の時価総額が低下し投資ファンドによる企業買収が続きました。生徒がこのまま金融教育を受けないうちに大人になることへの危機感を持った漆理事長は振り返ります。2006年には校長に就任し、学校改革に取り組んでいました。

「本校には『社会に貢献する女性を育てる』という創立以来の目標があります。それに照らして、アントレプレナーシップ教育は必ず必要になると確信を持っていたから、信念が揺らぐことはなかった」と言い切ります。

「生徒のためになることならやってみようという教員たちの価値観。経営者、会計士、ベンチャーキャピタリ

スト、コンサルティング会社のパートナーなど様々な立場で教員が手の届きにくい部分を補ってくれる保護者という存在。また協力してくれる卒業生。この、教育方針を理解している応援団の存在は、本校の大きな強みです」

事業計画から株主総会まで

現在の「起業体験プログラム」は、白ばら祭（文化祭）の模擬店を株式会社として起業し、事業計画、営業報告会議、株主総会、解散までを経験するもの。初回、配当方法がクラスでバラバラということに会計作業が終わってから気づき、総会が大もめにもめ、「来年はもうできない」と思った時も、「後輩のために諦めないで続けて

ください」と、改善レポートを作って学校の背中を押したのは生徒。その後も、仕入れ先の倒産で資金回収ができなくなるなどの「事件」は幾多ありましたが、生徒たちは乗り越えてきました。

「起業体験」は、高校のクラス単位での参加から、2021年以降、中3で始めるようになってきました。高3は大学受験に向かう時期と重なってしまうこと、またチームで取り組むプログラムだけでなく、高校では、個人の探究活動も重視していくという狙いから、高校生はクラス参加とせず、企画を立てた生徒がクラスの枠を超えて社員（賛同者）を募る形になりました。

事業化にあたり、コスト計算やデータに基づいて計画することを生徒に求め、事業計画のプレゼン項目は、「理念性」「チャレンジ性」「事業性」「実行性」の4つからなっています。15人程度のサポート委員（保護者）が評価し、その順位で、教室の配置や使用料も変わります。文化祭後の株主総会では、「企画実行力」「業績力」「広報力」が評価の観点です。

ユヌスさんの来校をきっかけに ソーシャルビジネスに軸足を移す

この「起業体験」は、以前は、「事業性」を強く意識していたようですが、現在は社会課題の解決に軸足を移して「理念性」を重視しています。

「契機となったのは、グラミン銀行の創設者でノーベル平和賞を受賞した、ムハマド・ユヌスさんを招いた2011年の講演会です。当時の日本では、ソーシャルビジネスという言葉もまだ一般的ではありませんでしたが、ユヌスさんの講演に目を開かれ理念やパーパスを重視する方向に変えていきました」



ムハマド・ユヌスさんと生徒、漆理事長(前列左)

現在、学年を超えた在校生の有志団体も生まれ、生理のタブーをなくしたいと活動するCLAIR。(クレア)、留学をきっかけに新しい教育手法を提案するJPE (Jasmine Peach Education) もあります。また子宮頸がんやHPVワクチンの知識や情報を広げる団体Lumiere (ルミエール) を立ち上げ大学生になった今も活動を続けている卒業生や、多忙な教員のサポートや学生の教職インターンシップを事業とする一般社団法人lightful※ (ライトフル) を作り、会社設立を目指している卒業生も。

「当初、NTVP (日本テクノロジーベンチャーパートナーズ) にボランティアでプログラムを導入いただき、学校の理念に照らし合わせて改良を続け、オーダーメイド化してきました。先輩から後輩へと情報が共有され生徒が育ち、教員の指導力が磨かれ、手を挙げて一生懸命起業(体験)することは「カッコいい」という学校文化が蓄積し、自走できるようになりました。」

職業意識の高まりと多様な進路

進路について質問すると、変化を口にされました。「以前は、理系といえば医療系とか、キャリアパスが見えやすい選択が多かったのですが、起業体験をはじめとした中高でのさまざまな取り組みを通じ、社会を知り、未来から逆算することで、学科選択の幅が広がっています。企業とのコラボや特別講座で、子育てやリカレント教育を経て転職した人、製薬会社の中で薬事法を扱っている人・・・いろいろな人生に触れてもらい、将来をしっかり見据えた上で、文理選択をするように指導しています。」

※ 一般社団法人 lightful
の情報はこちらから



(画像提供:品川女子学院。前ページ漆理事長画像も)

女子の進路指導で大事なのは学校歴でなく学習歴です。浪人する1年間は、女性にとっては20代30代の安全に出産できる大事な時間ともいえるので、学校名にこだわらず、学科にこだわり、留学や大学院に使うことを勧める結果、大学院進学も増えています。育児等でキャリアが中断しても復職できるいわば「復職力」が大事なのです。同校では、中一で「デザイン思考」を学びます。共感力や課題発見力を磨き、身近な課題を見つけることから社会課題に目を向け解決のためにアクションを起こすフレームワークを体に染み込ませます。中2で日本文化理解、中3から起業体験をします。高校に入ると少人数のグループでCBL (Challenge Based Learning) や個人探究に取り組んでいます。

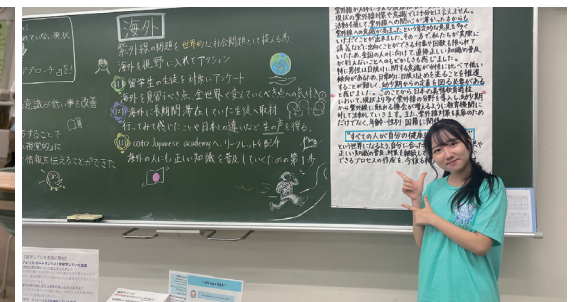
「28プロジェクトでは進路を早く決定するようにということは言いません。様々な外部とつながる体験を通し、『今の自分と未来の自分がどう繋がっていくのか』『学校の勉強が社会にどう繋がっていくのか』を知り、アンテナを立てておくことで集まってくる情報、モチベーションが大きく違ってきます。この成果は、20代卒業生のアンケートにも表れています。就職後の職業満足度、ウェルビーイング、アントレプレナーシップ等々、一般の数字と比較して、2割、3割高く出るものも少なくありません」

ポジティブアクションに必要な マインドとスキル

起業体験には課題もと漆理事長は言います。「生徒が考えたアイデアのアクションに関して、規模が大きく子



(株) evereshは、「匂い」を使ったストレス解消法を提案



(株) UrVaryの企業理念は「全ての人に紫外線に関する正しい知識と対策を」。ロート製薬とコラボ



(株) Kasstoryは、食品ロスをアップサイクル商品やワークショップで問題提起



(株) Lifetimeは時間をコントロールする「ToDoノート」を開発し販売



もの力では実現できないこともあり、大学受験と重なって中断せざるをえないケースもある。また、生徒のアイデアや知見を守る環境が今はまだ整備されていない」と。そこでICHI COMMONS株式会社※といったソーシャルセクターと企業をつなぐプラットフォームとのサポート関係も構築すべく動いているそう。

「未だ、ジェンダーギャップの大きい日本社会だからこそ、女子に特化した教育が必要です。今はラグビーの試合に女性だけがサッカーのルールで出ているようなものです。そんな中でも、トップリーダーとして活躍している女性に共通している経歴は、海外経験があること、資格があること。これまで述べてきた『学習歴』がある人です。ロールモデルがまだ少ない社会で、次に続く人達のため、アントレプレナーシップを持って一歩踏み出す心と、その自己効力感の裏付けとなるスキルを、中高6年間で身につけてもらいたいと思っています」

※ ICHI COMMONS株式会社の
情報はこちらから



2023年白ばら祭 (画像提供:品川女子学院)